古代宮殿建築における前殿と朝堂

その 8 朝堂の系譜と建築的特性 (1)

正 会 員 鈴 木 亘*

はじめに

前稿のⅦ—(1)において、古代宮殿における前殿の系譜と建築的特性を考察した¹⁾。本稿および次稿において、古代宮殿における朝堂の系譜と建築的特性を考察する。本稿では、中国の宮殿における朝堂の系譜について述べる。

〔1〕 中国の宮殿における朝堂の系譜²⁾

中国の宮殿において朝堂の存在が知られるのは漢代からである。中国宮殿の朝堂については大石良材氏の論考「朝堂の建築」³⁾および佐藤武敏氏の論考「唐の朝堂について」⁴⁾がある。前者は先秦時代から唐までの朝および明堂について論ぜられたものであるが、漢以降については明堂と前殿に関する考察にとどまり、朝堂については殆ど触れられていない。後者は唐の朝堂の構成と機能を中心に論ぜられ、漢以降の朝堂の機能と、その変遷についても明らかにされた。そこで、本稿では、主に漢から唐代に至る各宮殿における朝堂の位置と、その建築構成を考究する。朝堂の機能については佐藤氏の論考をもとにし、必要があればそれを補足することにしたい。なお、南北朝までの宮殿では、朝堂は宮門内に置かれた。そのため、朝堂の位置については禁中（禁省）および宮門との関係が問題になる。そこで、必要な限りこれらの関係について触れることにする。

1) 漢代の朝堂

(1) 漢長安未央宮の朝堂

長安城の西南隅の地を占める未央宮は、漢の高帝七年二月に造営が始められ、同九年十月に完成した宮殿である。その規模について、周囲 28 里あるいは 22 里 95 步、31 里などの説があるが⁵⁾、詳らかではない。未央宮は四面に司馬門を啓き、東面と北面に東闕、北闕を建てていた。北闕は未央宮の正門に位置する。南面および西面の司馬門は朱雀門および白虎門といい⁶⁾、皇帝の居る禁中は朱雀門の北方に置かれた。禁中は南面に端門を啓き、その内に南面して正殿である未央前殿(未央殿ともいう)が建てられた⁷⁾。未央前殿が南面するのに対して、宮の正門を北面に啓くのは特異であるが、それは未央宮の位

置する地形によるものであろう。

未央宮の朝堂は、後漢・張平子の西京賦に、

「朝堂承_レ東、溫調延_レ北、西有_二玉台_一、聯以_二昆徳_一。」

と記される。これは未央前殿を中心に記述したものであり、これによると朝堂は宮内に在って、未央前殿の東方に存したことが知られる。『三輔黄図』に、未央殿の東に宣明、広明両殿、同じく西に昆徳、玉堂両殿が在ると云う⁸⁾。これによると、宣明、広明両殿と朝堂との関係も考えられるが、朝堂において百官の集議が行なわれたこと、また後の宮殿における朝堂の位置からみて、朝堂は宣明、広明両殿よりも東方に在って、禁中東面の殿門外に置かれたとみるのが穏当のように思われる。また、後漢・班孟堅の西都賦に、

「左_二右庭中朝堂_一、百寮之位。蕭曹鸞邴、謀_二護乎其上_一、(後略)」

とあり、庭中に朝堂が建ち、その前庭左右に百官の位次が置かれたこと、丞相の蕭何、曹參などが堂上で国政を議ったことが知られる⁹⁾。佐藤武敏氏は、漢の朝堂の機能について、「前漢では、百官が集まり会議を行なうことを集議と呼んだ。集議は概して政治上の重要な問題が議せられ、すべて朝堂で行なわれたわけではないが、朝堂で行なわれることが多かったのではないか」とされている¹⁰⁾。

(2) 後漢洛陽南宮の朝堂

後漢の光武帝は、建武元年十月に洛陽へ遷都し、前漢以来の南宮の却非殿に幸した。その後、同十四年に南宮の前殿(崇徳前殿)が造営された¹¹⁾。南宮は洛陽城正陽の門である平城門の北に位置し、宮牆南面に南闕門を建て、宮掖門として東面に蒼龍闕門、北面に玄武闕門および北門を啓いていた¹²⁾。南闕門の北方は禁中であり、南面に端門を啓き、その内に正殿である崇徳前殿が建てられた。

南宮に朝堂が置かれたことは、『後漢書』(巻 27) 張湛伝により知られる。同伝に、光武帝の建武二十年、大司徒にたてられた張湛は朝堂に在って朝事を務めたことがみえる。これは光武帝の時の朝堂であり、南宮に存したと考えられる¹³⁾。また、『後漢書』(巻 43) 朱暉伝に、永平初めのこととして、正月朔旦、東平王倉は朝賀に参

* 文化学院 講師
(昭和 61 年 10 月 28 日原稿受理)

列しようとして、朝堂に控えていたことがみえる。これによると、朝堂は南宮の内に在り、しかも元正朝賀に参列する人の控場所になったらしく、崇徳前殿の近くに存したことが推察される。朝堂の位置は詳らかでないが、禁中の西側には玉堂殿および嘉徳殿を中心とする別宮（中宮）が営まれており¹⁴⁾、それよりすると、禁中の東側に存した可能性が高い。なお、『周礼』冬官考工記・匠人營国条に記す、「内有九室、九嬪居之。外有九室、九卿朝焉。」の記事に関する後漢・鄭玄の注に、

「内、路寝之裏也。外、路門之表也。九室、如今朝堂諸曹治事處。」

とあり、朝堂の一郭に諸曹を配していたことが知られる。朝堂の諸曹については、『漢書』（巻77）劉輔伝に見える「中朝」について、魏の孟康が、「中朝、内朝也。大司馬、左右前後將軍、侍中、常侍、散騎、諸吏為中朝。丞相以下至六百石為外朝也。」と注記するのが参照される。前漢時代には、昭帝以後、大將軍等が尚書の事を領し、それを中心に内朝が成立していた¹⁵⁾。朝堂の諸曹は録尚書事を中心とする内朝の尚書および符節台、蘭台などの官署を云うのかも知れない。朝堂の建築は不明であるが、『後漢書』（巻56）陳球伝に、朝堂における大会の時、数百人もの官吏が坐したと記しており、朝堂はかなりの広さをもっていたことが推察できる。

佐藤武敏氏は、後漢の朝堂の機能について、「一つは儀礼の行なわれる場もしくは儀礼に参列する人たちの控え場所、もう一つは前漢と同様、集議の行なわれる場所」をあげている。前者は永平十七年の朝堂における公卿百官による上寿、および永平初めの朝賀の時の控え場所の例である。後者は、百官が朝堂に集って会議する大議のほかには少数の高官が謀議する場合もあったこと、また朝堂は朝臣が上書する場でもあったことを指摘されている¹⁶⁾。なお、『晉書』（巻21）礼志下に「漢魏故事、遣將出征、符節郎授節鉞於朝堂。」とあり、出征の時、符節郎は朝堂において將軍に節鉞を授けるのが例であった。

2) 魏晉時代の朝堂

(1) 魏鄴宮の朝堂

魏の曹操が創めた鄴宮は、文昌殿を正殿とする禁中の東方に朝堂が置かれた。左太冲の魏都賦に、鄴宮の宮門について、

「巖巖北闕、南端迫遵、竦峭雙碣、方駕比輪、西闕延秋、東啓長春。」

と記す。これについて、唐李善注に収める晉の張載注に、「文昌殿前。值端門。端門之前。南當南止車門。又有東西止車門。端門之外。東有長春門。西有延秋門。」とある。これらによると、南端すなわち端門は禁中の正門であり、その南に啓く南止車門は鄴宮の正門、東西止車門は正門の左右に啓く掖門、端門外の東西にある長

春・延秋兩門は東面及西面に啓かれた宮門と考えられる。また、魏都賦によると、文昌殿の東方に中朝があり、その正殿を聴政殿と称した。中朝は、すなわち朝堂のことである¹⁶⁾。同賦によると、聴政殿は赤色に輝く建物であり、材は半加工、華美を避けても極端に走らず、木は彫飾を施さず、地面に錦を敷かず、玄妙な徳化が形に現われ、魏国の美風を受けついだものである、と云う¹⁷⁾。また、聴政殿の前方には宣明、顯陽、順徳・崇礼の諸門が相通じ、その左右に諸公の居る省中が天子の居る禁台と門を連ね、廊を対して建ち、そこに直事のよれる所、典刑の蔵むる所、御史台、符節・謁者台、膳夫・藥劑司などの宮内官署が置かれていた¹⁸⁾。これについて、張載注に、聴政殿の前に正門である聴政門が建ち、その南に順次、升賢門（左右に崇礼・順徳兩門を建ち、三門並南向き）、宣明門、顯陽門、司馬門の諸門が相通じていたとする。そして、司馬門は闔（門番）が守る門であるという¹⁹⁾。また、省中の諸官署について、升賢門の内、聴政門の外を東に入ると納言闔のある尚書台があり、宣明門の内、升賢門外を東に入ると内鑒署があり、顯陽門の内、宣明門外を東に入ると、最南に謁者台閣、中央に符節台閣、最北に御史台閣があり、三台は並別して西に向い、符節台の東に丞相の諸曹がある、と云う²⁰⁾。司馬門は南面の宮牆に啓かれた東門（東止車門）である。『三国志』（巻19、魏書）陳思王植伝に、植は嘗て車に乗って馳道を行き、司馬門を開いて出たことがあった。大祖は大いに怒って、公車令を死に坐さしめた、と載せており、司馬門の内に馳道が通り、朝堂に達していたことが推察できる。このように、司馬門から朝堂へのアプローチは頗る嚴重であった。聴政殿は内朝すなわち朝堂の正殿であり、その名の通り、丞相による聴政が行なわれたのであろう。

(2) 魏晉の洛陽南宮の朝堂

後漢の洛陽城南北兩宮は、後漢末に董卓の兵火によって焼失した。その後、洛陽城には魏の曹操（武帝）および文帝の時に北宮が造営され、また明帝の青龍三年に南宮が造られた。後魏・酈道元の『水經注』には、魏の明帝は、上は太極にのっとり、洛陽の南宮において太極殿を漢の崇徳殿の故處に起こし、雉門を改めて閭闔門とした、と伝える²¹⁾。太極殿は禁省の正殿であり、閭闔門は宮の正門である。これによると、宮の四牆は後漢のそれを踏襲したことが推定される。南宮の宮門については、正門の南止車門（閭闔門）、西面の西掖門が『三国志』にみえる²²⁾。また、『晉書』にると、正門の東側に南掖門、東面に雲龍門および東掖門を啓いていた²³⁾。

魏晉の洛陽南宮に朝堂が存したことは正史から知られる（後述）。その位置は詳らかでないが、これに関して、つぎの点が注意される。『晉書』（巻59）趙王倫伝によると、南宮南掖門の内に尚書省、中書省などの宮内官署

が置かれたこと、また同門の内に崇礼閣、宣化閣が建っていたことが推察できる²⁴⁾。『晉書』(巻27)五行志上に、

「永興二年七月甲午、尚書諸曹火起、延崇礼閣及閣道。」とあるのは、南掖門内にある尚書諸曹である。前述のように、魏の鄴宮では司馬門(南掖門)の内に尚書台等の官署が置かれ、その北方に朝堂が存したが、魏晉の洛陽南宮も朝堂を南掖門の北方に置き、これと類似の構成であった可能性がある。

朝堂の機能として、『魏書』(巻27)穆亮伝にのせる晉令により、当時、公卿による朔・望の定期的な集議が行なわれたことが知られる。また、出征の場合、符節郎が朝堂において將に節鉞を授けるのが例であった¹⁰⁾。なお、『晉書』(巻36)張華伝に、恵帝の時、皇太后を廢するについて群臣を朝堂に会して議せしめたこと、同書(巻59)趙王倫伝に、倫父子が凶逆のため宜しく伏誅するように、と云う梁王彤の上表により、百官が朝堂において会議をしたことがみえ、国の大事は朔・望に限らず百官が朝堂に会して集議したことが知られる。このほか、朝堂にて皇帝挙哀が行なわれた²⁵⁾。

(3) 東晉建康宮の朝堂

建康(建鄴)は、かつて呉の都城が営まれたところである。晉の王族である司馬睿(元帝)は、建武元年三月秦王の位につき、それに伴い百官を整備し、建康に宗廟・社稷を建てた。そして、同二年三月晉の愍帝崩御の後、建康において帝位についた。建康宮は元帝の時の造営にかかわるが、創建当初の建築は詳らかでない。

建康宮は都城の北方やや東に偏した位置にあり、周囲八里の規模と伝えられる。台城とも呼ばれ、宮牆を二重にめぐらし、北牆は都城壁を兼ねていたらしい²⁶⁾。外の宮牆に啓かれた宮城門についてみると(以下、外の宮牆に啓かれた門を宮城門、内宮牆のそれを宮門とし区別する)、南面には正門に大司馬門、その東側に閤闔門(南掖門)、また東面に東掖門、西面に西掖門、北面に平昌門が啓かれた。すなわち、『建康実録』(巻7)晉成帝咸和七年十一月条の注に、

「按修宮苑記、建康宮五門、南面正中大司馬門、世所謂章門、拜章者伏于比門待報、南對宣陽門、相去二里、夾道開御溝、植槐柳、世或名為閤闔門、南面近東閤闔門、後改為南掖門、門三道、世謂之天門、南直閤宮西大路、出都城開陽門。正東面東掖門、正南平昌門、門上有爵絡、世謂之冠爵門、南對南掖門。」

と記す²⁷⁾。また、宮門は南面正中に端門が建ち、これが禁省(正殿は太極殿)の正門を兼ねていたと推定される²⁸⁾。東面には雲龍門、西面には神虎門が啓かれた²⁹⁾。

建康宮の朝堂については、『晉書』(巻8)海西公太和六年十一月条に、海西公を廢するにあたり、百官を朝堂に集めて崇徳太后の宣命が下されたことがみえる。朝堂の位置は詳らかにし得ないが、東晉の建康宮を継承した

南朝の朝堂が台城内に在って、雲龍門の東方、南掖門の北方に存したことが知られるので(後述)、東晉の朝堂も同位置に在ったとみてよいであろう。朝堂の機能として、上記のほかに皇帝挙哀が知られるだけである。なお、『晉書』(巻6)明帝太寧三年四月条に、

「詔曰、大事初定、其命惟新、其令下太宰司徒已下詣都坐參議政堂、諸所因革、務盡事中。」

とある。また、同書(巻67)温嶠伝に、明帝の時として、「是時天下凋弊、国用不足、詔公卿以下詣都坐、論時政之所先、嶠因奏軍国要務。」

と記す。「都坐」は尚書省の都堂と思われるが、「都坐」で政事を論じていることは注意される。あるいは朝堂をそれに当てたのであろうか。

3) 南北朝の朝堂

(1) 南朝建康宮の朝堂

南朝の建康宮は東晉のそれを継承した。宮城正門を大司馬門と云い、その北方は禁省の一郭である。禁省の正殿は太極殿であり、その南に正門である端門を啓いていた。また、司馬門の東側に南掖門、同じく宮城の東面に東掖門、西面に西掖門、北面に北掖門(旧平昌門。宋代に広莫門と改名、後に承明門と改む³⁰⁾)が啓かれたことは東晉と同じである。ただし、宋の文帝の時に台城(建康宮)の東西に万春、千秋の二門が啓かれ、また梁の武帝の時、台北面の北掖門の西に大通門が開かれた³¹⁾。なお、『梁書』(巻2)武帝天監七年正月戊戌条に、

「作神龍、仁虎闕於端門、大司馬門外。」

と記す。これによると、梁代には、端門は宮の正門でなく、宮城門の一つを指したらしい。『隋書』(巻12)礼儀志7に収める梁の宮城侍衛の制には、宮城四面の門として、「東西掖、端、大司馬、東西華、承明、大通等門」をあげる。東西掖門および東西華門は東西両面の宮城門、承明・大通両門は北面のそれであり、端門は大司馬門とともに南面に啓かれた宮城門と考えられる³²⁾。『建康実録』(巻8)東晉穆帝升平五年二月条の注記に、

「按南掖門、是建康宮南面東門、陳朝改為端門、南出都城開陽門、即宣陽東門也」

と記すが、梁代に南掖門を端門と改称し、その外に神龍闕を建てたものと思われる。

ところで、朱僕氏『金陵古蹟図考』は、建康宮の宮城門について、宋代に東掖門、西掖門を東華門と西華門に改めたとし、また、梁武帝の天監十年に初めて宮牆を三重に作り、外より第三重目の宮牆の東面に万春門、西面に千秋門を開いたとしている。これは台城内の朝堂の位置に関係するので、つぎにこの二点について検討する。まず、東西掖門と東西華門の関係であるが、上に引いた『隋書』の記事によると、両者は別の門である³³⁾。正史によると、東西掖門の記事は宋齊梁陳の各代を通して見られる。これに対して東西華門は、『梁書』(巻56)侯

景伝に、太清二年十月、侯景が台城を攻めて大司馬門と東西華諸門を焼いたと記すのが初見である。侯景伝によると、翌三年、西華門外に壇を設けて侯景との間に和睦の同盟を結んでおり、東西両華門は台城の東西両面に啓かれた宮城門である。一方、『宋書』（巻5）文帝元嘉二十年正月条に、台城東西に開いたとある万春・千秋二門は、宋齊兩代の正史に見えるが、梁陳代にはみられない³⁴⁾。この点は、つぎに述べることにとも関係するが、宋代に開かれた万春・千秋二門は梁代に東華門、西華門と改名されたことを推測させる。つぎに、梁代に台城の宮牆を三重に作ったとするのは、『建康実録』（巻17）に、

「天監十年，初作宮城門三重，及開二道。」

とあるのに拠っている。しかし、『梁書』（巻2）天監十年の条には、

「是歲，初作宮城門三重，及開二道。」

と記す。朱僕氏は、これについて棲は衍字であると述べているが、上記は宮城門に関する記事であり、『梁書』により、初めて宮城門の上に三重の樓を作り、二道を開いたと解するのが妥当であろう。また、梁陳代の台城が第二重宮牆の内に第三重宮牆を作り、その東面に万春門、西面に千秋門を啓いたとするのは、『建康実録』に引く宮殿簿の記事に拠ったものである。すなわち、同実録（巻20）陳書下に、宣帝太建七年六月乙酉に雲龍・神虎二門を改作したことをのせ、その注記に、

「按宮殿簿。雲龍是二重宮牆東面門。晉本名東華門。東出東掖門。梁改之。西對第三重牆萬春門。神虎門是第二重宮牆西面門。晉本名中〔當作西〕華門。西出西華門。晉本西掖門。宋改名西華門。東入對第三重宮牆千秋門。」

と記す。しかし、この記事には東西両華門は東西両掖門を改名したとする誤りがある。また、雲龍門、神虎門は宮牆の東面および西面の門であり³⁵⁾、万春・千秋二門がその内にあるとすると、これは禁省東面および西面の殿門ということになる。けれども、東西の殿門としては、宋齊代に東中華門、西中華門が知られ³⁶⁾、梁代にもそれが存したことは、つぎの記事から知られる。『隋書』（巻26）百官志上に、梁の官制に関して、

「廷尉卿梁國初建，曰大理，天監元年復改為廷尉。有正監平三人。元會，廷尉三官與建康三官皆法冠，玄衣朝服，以監東西中華門。（後略）」

と記す。先に、万春・千秋二門は梁陳代の正史に見えないと述べたが、以上の点から、万春・千秋二門は、宋齊代の台城第一重宮牆に開かれた宮城門であり、梁代に東華門、西華門と改名されたとするのが穏当であろう。

さて、建康宮の朝堂が台城内に在ったことは、つぎの記事から知られる。『南史』（巻62）徐孝克伝に、

「禎明元年，入為都官尚書。自晉以來，尚書官僚，皆攝家屬居省。省在台城内下舍，門中有閣道，東西跨路，

通于朝堂。其第一即都官省，西抵閣道，年代久遠，多有鬼怪。（後略）」

と記す。これによると、尚書省は台城内の下舎に在った。そして下舎の門中に閣道があり、東西の路を跨いで、朝堂に通じていた。ここに「東西跨路」は東西に路を跨ぐ」とも読めるが、つぎに「その第一が都官省で、西の方閣道に抵る」とあるから、閣道は南北に通じ、その左右に都官尚書等の五尚書が並んでいたと解せられる。従って、ここは南北の閣道が、東西の路を跨いで、朝堂に通じていたと解するのが良いように思われる。すなわち、朝堂は尚書省の北方に在り、尚書省と閣道で通じていたらしい³⁷⁾。『宋書』によると、尚書省に上下兩省が在り³⁸⁾、宮城内に置かれたのは尚書上省である。これが雲龍門外に在ったことは、『南齊書』（巻4）鬱林王隆昌元年七月二十二日条に、帝を廃するに当たり、蕭詧および坦之等は尚書省にて曹道剛、朱隆子等を誅し、ついで兵を率いて尚書省より雲龍門を入り、太極殿の西鐘樓下に結集した、とある記事より知られる。おそらく、朝堂及び尚書省閣道の南は南掖門に通じていたのであろう³⁹⁾。

なお、『南史』（巻66）侯安都伝によると、天嘉四年春、陳の文帝は司空・江州刺史侯安都を引いて嘉徳殿に宴し、またその部下の將帥を集めて「尚書朝堂」に会せしめた。そして、その坐において安都を収め、西省に囚えた。また、その將帥を収めて盡く馬仗を奪いこれを釈した、という。尚書省は都堂を正堂とし、古くそこにおいて尚書八坐を中心に朝礼及び朝政が行なわれた。すなわち、『宋書』（巻39）百官志上・尚書の項に、

「晉西朝八坐丞郎，朝晡詣都坐朝，江左唯旦朝而已。」

とある。また、東晉の建康宮では、尚書都坐において太宰司徒已下が参議して政事を議ったことは前述した。侯安都伝に記す「尚書朝堂」が朝堂あるいは都堂のいづれであるか詳らかでないが、その語から、当時、尚書省は朝堂と密接な関係を持っていたと推察できる。

つぎに朝堂の機能について述べる。『宋書』（巻57）蔡興宗伝に、前廢帝の大明末年頃、録尚書事、尚書令以下が「上朝」。すなわち朝堂に上り、博く朝政を論じたこと、同じく令録以下が朝堂にて百官の選考を議したことがみえる。また、『梁書』（巻3）武帝大同六年八月辛未条に、

「詔曰，經國有體，必詢諸朝，所以尚書置令，僕，丞，郎，旦旦上朝，以議時事，前共籌懷，然後奏聞。頃者不爾，每有疑事，倚立求決。古人有云，主非堯舜，何得免言便是。是故放勳之聖，猶咨四岳，重華之叡，亦待多士。豈朕寡德，所能独斷，自今尚書中有疑事，前於朝堂參議，然後啓聞，不得習常。其軍機要切，前須諮審，自依旧典。」

と記す。これによると、古く尚書八坐丞郎が毎朝上朝して時事を議し、しかる後、それを奏聞したこと、梁初には疑事が有る毎に皇帝の即決が求められていたが、この

日の詔により、尚書中に疑事がある時は、先ず朝堂において参議し、その後で啓を聞くように定められた。以上は丞相（録尚書事）及び尚書八坐丞郎による集議の例である。なお、百官選考は尚書の職掌であり、本来は尚書都堂にて行なうべきことである。これと、先の「尚書朝堂」の記事を合わせ考えると、南朝の朝堂は尚書の都堂的性格をもっていたことが推定される。このほか、『宋書』（巻3）に零陵王（晉恭帝）の薨により、武帝が百僚を率いて朝堂において哀を挙げたことを伝える。また、『南史』（巻8）梁本紀下に、大宝三年三月、簡文帝の梓宮を朝堂に奉安したことがみえる。これは殯の例である。なお、陳代には中書省が朝廷の実権を握り、国政は禁省内になる中書省で議せられたらしい⁴⁰⁾。陳代の朝堂については、『陳書』（巻4）廢帝光大二年十一月甲寅条に、慈訓太后が群臣を朝堂に集めて、帝を廢する令を下した記事がみえる。

2) 北魏洛陽宮の朝堂

北魏の孝文帝は、太和十七年十月に魏晉時代の洛陽城の故地に都城の建設を始め、翌十八年十一月に洛陽へ遷都した。北魏の洛陽城の宮殿について注意すべきことは、魏晉までの洛陽城の宮殿が南北両宮に分かれていたのを一つに統合したことである。すなわち、魏晉時代の南宮を廢して、北宮の故地に新たに宮が営まれた⁴¹⁾。宮殿は都城の北部中央やや西に偏した位置にあり、南北長約1.4 km、東西広約0.66 kmの長方形の区画を占め、周圍に宮牆を築いていた⁴²⁾。宮の正門は南面に啓かれた閭闔門であり、その外に巨闕が建てられた。太極殿を正殿とする禁省はこの閭闔門の北方に在った。後魏・酈道元撰『水經注』（巻16）穀水の項によると、洛陽宮の宮門とし閭闔門の東側に司馬門（南掖門）、西面に北より千秋門、神虎門、西掖門を開いていた。また、東面には東北に万歳門、東南に東掖門が開かれたと推定される。なお、『水經注』穀水項に、

「其一水自千秋門南流，逕神虎門下，東對雲龍門，二門衡楸之上，皆刻雲龍風虎之狀，以火齊葺之，（後略）」と記しており、神虎門に相對して東に雲龍門が建っていたが、雲龍門は宮門ではなく、禁省東面の門である。これは、『魏書』（巻13）宣武靈皇后伝に、

「先是，太后敕造申訟車，時御焉，出自雲龍大司馬門，從宮西北，入自千秋門，以納冤訟。」

とある記事から知られる。これにより、北魏の洛陽宮は西面の宮牆が禁省西面牆を兼ねていたことが推察される。発掘調査によると、北魏洛陽宮の正門（閭闔門）の位置は正中より西に偏している⁴²⁾。これは上記の点と関係すると思われる。

朝堂については、『魏書』（巻64）郭祚伝に、

「故事，令僕中丞嚮唱而入宮門，至於馬道^{（馬也力）}。及祚為僕射，以為非盡敬之宜，言於世宗，帝納之，下

詔御在太極，嚮唱至止車門，御在朝堂，至司馬門。嚮唱不入宮，自此始也。」

とある記事が注目される。ここに止車門は閭闔門、司馬門は南掖門である。これにより、朝堂は司馬門（大司馬門とも記す）の北方、禁省の東側の位置に在ったと推察できる。なお、『魏書』（巻75）余朱世隆伝に、尚書令世隆が牛車に乗って尚書省の西門を出て、東掖門より帰宅した記事があり、尚書省は東掖門内に在った。同書によると、尚書省は上下両省に分かれており⁴³⁾、宮門内に在るのは尚書上省と思われる。朝堂と尚書上省との位置関係は不明であるが、南朝の建康宮や魏の鄴宮の例からすると、司馬門と朝堂の間に馳道が通され、その左右に尚書諸曹が配されていた可能性が高い。朝堂の機能をみると、『魏書』に、皇帝が朝堂に臨幸して百官を選考し、群臣の黜陟を加えたこと、靈太后が朝堂において孝秀および州郡計吏を策試したこと、ほかに皇帝拳哀などの記事がみえるが⁴⁴⁾、朝堂における集議の例は認められない⁴⁵⁾。むしろ、『魏書』によると、当時、国政は太極殿の西にある栢堂あるいは門下省において議られたらしい。すなわち、同書（巻9）孝明帝延昌四年正月庚申条に、

「詔太保高陽王雍入居西栢堂，決庶政，又詔任城王澄為尚書令，百官總已聽於二王。」

と記す⁴⁶⁾。栢堂は太極西栢堂とも記され、太極殿の西に位置し、禁省内の西方に置かれた中書省と関係の深い建物であったと推察される。また、『魏書』（巻9）孝明帝熙平二年八月丁未条に、大師高陽王雍が禁省内の門下省に入居し、尚書奏事を参決したことがみえる⁴⁷⁾。

（3）北齊鄴都南宮の朝堂

鄴都南宮は、東魏の孝静帝の時、旧城の南に築城された南城の宮殿である。南城の中央北部に位置し、その規模は東西460歩（276丈）、南北は後園を合わせて900歩（540丈）と云われる⁴⁸⁾。南宮は北齊の皇居として継承された。南宮の建築については、顧炎武の『歷代帝王宅京記』（巻12）鄴都南城・宮室の項に引く鄴中記に記載がみえるが、宮門の記事はかなり混乱がある。そこで、まず正史を見ておこう。『隋書』（巻8）礼儀志3に、後齊講武礼について、

「河清中定令，每歲十二月半後諱武至晦，逐除二軍兵馬，右入千秋門，左入万歳門，並至永巷南，下至昭陽殿北，二軍交。一軍從西上閣，一軍從東上閣，並從端門南，出閭闔門前橋南，戲射並訖，送至城南郭外罷。」

と記す。ここに千秋・万歳両門は西面及び東面の宮門、昭陽殿は太極殿（禁省正殿）の北に建つ皇帝所御殿、端門は禁省の正門、閭闔門は宮の正門と考えられる。鄴中記に閭闔門の上に壮大な清都觀が在ると云うのは、それが宮門であることを示すであろう。閭闔門の東側には東止車門が啓かれた。『北齊書』（巻22）盧文偉の子詢祖

伝に、「後朝廷大遷除、同日催_レ拜。詢祖立_ニ於東止車門外_ニ、為_ニ二十餘人_一作_レ表、文不_レ加_レ點、辞理可_レ觀。」とあるのがそれである。なお、『歴代帝王宅京記』（巻12）鄴都南城・宮室雲龍門、神虎門の項に、

「鄴中記云、端門之内、太極殿前、東西有_レ街、東出_ニ雲龍門_ニ、西出_ニ神虎門_ニ、朝官至_ニ此門_ニ、則整_ニ肅衣冠_一而入。」と記す。これによると、雲龍門、神虎門は禁省の東面及び西面に啓かれたことが推察される⁴⁹⁾。

北齊南宮の朝堂については、『隋書』（巻9）礼儀志4に、

「後齊每_レ策_ニ秀孝_一、中書策_ニ秀才_一、集_ニ書策_一考_ニ貢士_一、考功郎中策_ニ廉良_一、皇帝常服乘輿、出坐_ニ於朝堂中楹_一。秀孝各以_ニ班草_一對。其有_ニ脱誤_一、書謚孟浪者、起_ニ立席後_一、飲_ニ墨水_一、脱_ニ容刀_一。」

とある記事が注意される。ここに「朝堂」は皇帝の御座のある正堂と考えられる。また、「中楹」は正堂の入側（内槽）に建つ独立柱と解せられる⁵⁰⁾。これは朝堂が内槽・外槽の構造をもつ建物であることを示すであろう。また「班草」は草（むしろ）を地に鋪いて坐ることであり、正堂の前は中庭であった。なお、上記の内容は、皇帝が朝堂に臨幸して秀孝の策試を行なうことを示す。これによると、朝堂は前代と同様、宮門内に置かれたと推定される。また秀孝の策試は尚書省の職掌であり、朝堂と尚書省との関係が想定される。宮内の尚書省は雲龍門外に在った。すなわち、『北齊書』（巻41）鮮于世榮伝に、天統七年のこととして、

「尋有_レ勅令_下與_ニ吏部尚書袁聿修_一在_ニ尚書省_一檢_中試舉人_上。為_ニ乘馬_一至_ニ雲龍門外_一、入_ニ省北門_一、為_ニ憲司_一舉_ニ奏免官_一。」

と記す。ここに尚書省は宮門内に置かれた尚書内省である。これは、『歴代帝王宅京記』（巻12）鄴都南城・尚書省卿寺項に、

「鄴中記曰、尚書省及卿寺百司、自_ニ令僕_一而下至_ニ二十八曹_一、並在_ニ宮闕之南_一、」

とあり、尚書外省が宮城正門の南に存したことから知られるであろう。以上、朝堂が尚書内省の近くに在ったとすると、その位置は雲龍門外にあって、尚書省の北方の可能性がある⁵¹⁾。

朝堂の機能をみると、皇帝による秀孝策試のほかに、つぎの記事がある。『北齊書』（巻39）祖珽伝に、後主の時、祖珽は罪を受けて侍中僕射の要職を解かれた。韓長鸞は珽を朝堂に立たせて誚責を加えた、とある。また、『隋書』（巻9）礼儀志4・冊皇太子の項に、後齊の制として、冊皇太子儀の翌日、中庶子中舍人は章を奉って朝堂に至り、皇帝に謝す、とある。しかし、朝堂における集議の例はみえない。『北齊書』によると、国政は禁省内の含光殿、涼風堂などで議せられたらしい⁵²⁾。

（4）北周長安宮の朝堂

西魏及び北周の都した長安の宮殿については知られる

ところが少ない。『周書』によると北周の長安宮は宮の正門を応門と云い、その北方に禁省が置かれたらしい。禁省の正門を路門と云い、その内に正殿である路寝が建てられた。応門、路門、路寝の名は『周礼』によるものである。なお、北周の宮門については、以上のほか、東面に崇陽門、西面に肅章門、北面に玄武門を啓いていたことが知られる⁵³⁾。『周書』によると、元正朝賀、大赦・改元、冊柱国などの重要な朝儀は、皇帝が路門に出御して行なわれた⁵⁴⁾。元正朝賀などの大儀は、南北朝には禁省正殿（前殿）で行なうのが例であり、これを路門外で行なうのは異例である。これは路門前の広場を治朝とした『周礼』の三朝制に倣ったものと思われる。

朝堂については、『周書』（巻40）樂運伝に、宣帝の時、樂運が櫬を輿して朝堂にいたり、帝の八失を陳べたとあり、その存在が知られる。また、『隋書』（巻47）柳謩之伝によると、煬帝の大業三年に、齊王暕を長安大興宮の西朝堂前に立たしめて、吏部尚書牛弘が齊王に向って勅を宣べているが、その勅文につぎのように記す。

「我昔隋_ニ緣恩寵_一、啓_ニ封晉陽_一、出_ニ蕃之初_一、時年十二。先帝立_ニ我於西朝堂_一、乃令_ニ高穎_一、虞慶則、元旻等、從_ニ内送_一王于相於我_ニ。于_レ時誠_レ我曰、（後略）」

煬帝が十二才の時と云うと開皇元年頃であり、隋の大興城は未だ造営されていなかった。従って、この勅文に誤りが無いとすれば、勅文にみえる「西朝堂」は北周の長安宮に関係し、同宮に東・西両朝堂の存在が推定できる。朝堂の位置は詳らかでないが、東・西両朝堂が存したとすると、後述の隋唐の例からみて、応門前の左右に置かれたことが類推される。朝堂の機能については、上述の朝臣上陳のほかに皇帝拳哀が知られるだけである⁵⁵⁾。

4) 隋唐代の朝堂

（1）長安大興宮（唐・太極宮）の朝堂

隋の長安大興城は、文帝の開皇二年に、旧都長安城の東南にあたる龍首原の地に新たに造営された都城である。宮城は皇城の北に位置し、宮城の南面中央に啓かれた正門を広陽門（後に昭陽門と改名）という。広陽門の北方は大興殿を正殿とする禁省の一郭である。大興宮の朝堂は宮城正門前に在って、その左右に東・西両朝堂が置かれた。すなわち、『隋書』（巻47）柳謩之伝に、

「大業三年、車駕還_ニ京師_一、拜為_ニ齊王長史_一。帝法服臨_ニ軒_一、備_ニ儀衛_一、命_ニ齊王_一立_ニ於西朝堂之前_一、北面。遣_ニ吏部尚書牛弘_一、内史令楊約、左衛大將軍宇文述等_一、從_ニ殿庭_一引_ニ謩之_一、詣_ニ齊王所_一、西面立。牛弘宣_レ勅、謂_ニ齊王_一曰、（後略）」

と記す。これは大興宮の西朝堂において、齊王に宣勅を下した記事である。『隋書』（巻41）高穎伝に、大興城造営の時、新都大監の高穎は朝堂の北にある槐樹の下に坐って聴事したと伝えるが、この槐樹は広陽門の前に在っ

て、百三十年たった唐の先天年間まで残っていたという¹⁰⁾。これにより、大興宮は広陽門前の左右に東朝堂、西朝堂を置き、朝堂の北に槐樹が立っていたことが知られる。

隋の大興宮は唐代に太極宮と改称して継承された。発掘調査によると、宮城は東西広約2820m、南北長1492mの周囲に牆壁をめぐらし、北牆は都城壁を兼ねていた。太極宮は宮城の中央に在って、東西広1285m、南北長1492m程の規模と推定され⁵⁶⁾、その東西に東宮および掖庭宮が営まれた。太極宮は南面に五門を啓き、中央の正門を承天門（隋・昭陽門）という。その北方に禁省（正殿は太極殿、隋の大興殿を改称したもの）が置かれたことは隋と同じである。

太極宮の宮城正門前に東・西兩朝堂が存したことは、『大唐開元礼』により知られる。同開元礼（巻129）嘉礼・宣赦書の項に、つぎのように記す。

「其日質明，本司承詔宣告内外，隨職供辦，守宮設文武群官次於朝堂，如常儀，群官依時刻皆集朝堂，俱就次各服其服，奉礼設文武群官版位於順天門外，東西，當朝堂之南，文東武西，重行北面相對為首，設中書令位於群官西北，東向，刑部侍郎帥其屬，先取金鷄於東朝堂之東，南向，置鼓板於金鷄之南，遂擊鼓，每一鼓投一板，刑部侍郎錄京師見囚集於群官之南，北面西上，囚集訖鼓止，通事舍人引群官各就位，中書令受詔訖，遂以詔書置之於案，令史二人對掌案，通事舍人引中書令，持節者前導，持案者次之，詣門外位立，持節者立於中書令之南，少西，令史掌案者立於中書令之西北，俱東面，立定，持節者脫節衣，持案者進詣中書令前，中書令取詔書，持案者以案退復位，中書令稱有詔書，群官皆再拜，宣赦群官又再拜，舞蹈又再拜，刑部執囚，刑部尚書前受詔訖，退復位，持節者加節衣，通事舍人引中書令，節前導而行，又通事舍人引群官還次，」

これは、順天門（承天門）外の東・西兩朝堂の前で行なわれた、大赦宣詔の儀礼を規定したものである。これによると、文官は東朝堂の南、武官は西朝堂の南に版位が置かれ、各々北面して行なわれており、東・西兩朝堂は南面して建っていたことが推察できる。これは同じ『大唐開元礼』（巻129）に記す群官詣闕上表や朝堂冊命諸臣儀の記載によってもうかがえる。前者では、文武群官位は「東朝堂之前，近南」に北向に設けられ、表を受ける中書令の位は「群官の北，南向」に置かれている。また後者では、受冊者の版位は同じく「東朝堂前，近南，北向」に設けられ、舍人宣冊位はその北，南向に設けられた。先に引いた大業三年の宣勅の記事では、宣勅を受ける斉王は西朝堂の前に北面して立っており、上例と合わせ考えると、隋の東西兩朝堂も南面していたとみてよいかも知れない。

ところで、『大唐六典』（巻7）工部尚書郎中員外郎の項に、宮城正門である承天門について、元正冬至に大いに燕会を設け、過や罪をゆるし、旧を除き新を布き、万

国の朝貢、四方の賓客を受ける、そのような時、皇帝は承天門に御して政を聴く。けだし、古の外朝である、と記す。また禁省正殿である太極殿について、皇帝が朔・望に坐して朝を視るところで、古の中朝であるといい、同じく太極殿の北に建つ兩儀殿について、皇帝が常日、朝を聴き、事を視るところで、古の内朝であると記す。すなわち、唐の太極宮（隋・大興宮）は三朝の制をとっていた。佐藤武敏氏は、『大唐六典』に古の外朝、中朝、内朝というのは、『周礼』の三朝制を指すことを明らかにされている⁵⁷⁾。なお、唐・韋述撰の兩京新記に、

「皇城南面六門，正南承天門，門外兩觀，肺石，登聞鼓」と記す⁵⁸⁾。ここに「兩觀」とあるのは承天門上に建つ門樓のことと考えられる。また肺石・登聞鼓は承天門前の左右に置かれたもので、承天門とともに外朝を構成する重要な施設である。そして、上記に朝堂のことがみえないのは、朝堂が本来、外朝施設でなかったことによると思われる。以上により、隋唐の朝堂は、外朝である宮城正門前の広場に付設して置かれたと考えてよいであろう。これは南北朝までの朝堂が「中朝」として内朝政事の中心的施設であったのに対して、大きく異なっている。

つぎに朝堂の機能について見てみよう。『隋書』によると、大興宮の朝堂において外国使接待、宣勅、百官上封事（上表）、冤屈、処刑などが行なわれた⁵⁹⁾。唐代の朝堂もこれとほぼ同じであり、ほかに冊命諸臣、宣赦書、外国使饗宴などの機能が知られる。佐藤武敏氏は唐代の朝堂の機能を儀礼と裁判の二つに大別されている。それをまとめると、つぎのようである⁶⁰⁾。

（1）儀 礼

賓礼：蕃主と使者の接待

軍礼：露布の宣告

嘉礼：①朝会（元正冬至朝賀，通常の朝賀），②元服，③納后，④皇太子納妃，⑤臨軒冊命皇后・皇太子・諸王大臣等，⑥朝堂冊命諸臣，⑦宣赦書，⑧群臣詣闕上表，⑨外国使饗宴，⑩凱旋將士・朝集使・県令等の饗宴

（2）裁 判

訴訟，処刑

この中、嘉礼の①②④⑤は太極殿における儀式であり、また③は兩儀殿など皇帝所御殿における儀式であって、朝堂は門外位とし群臣あるいは客使の席次が置かれるだけである。従って、これは朝堂における儀礼ではない。その他は朝堂または朝堂前の広場で行なわれたと考えられる。そこで、これを南北朝までの宮殿における朝堂の機能と比較し、隋唐の朝堂の性格を考えてみたい。

隋唐の朝堂の機能について特に注目されるのは、佐藤武敏氏が指摘されるように、南北朝までの朝堂で行なわれた集議の機能が認められないことである¹⁰⁾。唐代には、宰相による集議の場合は、禁省内にある門下省あるいは中

書省の政事堂に移されたのである⁶¹⁾。なお、このように宰相集議を禁省内の中書・門下両省で行なう動きが、すでに南北朝末の宮殿にみられることは前述した。また、南北朝の朝堂では、皇帝による百官選考、秀才策試などの尚書に係る儀式が行なわれた。唐代には、これらの業務は尚書都省で行ない、その名を中書門下に送り、上奏された。この場合に注意されるのは、南北朝までの宮殿では、尚書都省は宮内に置かれていたが、唐代には、それが宮城外に移されていたことである。すなわち、南北朝期の尚書内省と外省が統合され、尚書省は行政官庁として皇城に置かれたのである。そして、これは隋に遡ると考えられる。隋唐の朝堂が宮城外に置かれた背景として、政事堂の成立とともに、南北朝までの宮殿において朝堂と密接な関係にあった尚書内省が宮城外に移されたことも合わせて考えるべきであろう。このような点からすると、隋唐において朝堂を宮城内に存続させる意義は殆ど無くなっていたと考えられる。なお、隋唐において尚書都省を宮城外に置く契機となったのは、北周における官制の簡略化であったと推察される。『通典』(巻22)尚書省の項に「後周無_レ尚書_一、隋及大唐皆有、其制略同、凡尚書省、事無_レ不_レ愆_一」とあり、北周では尚書省が置かれなかった。

つぎに隋唐の朝堂の機能のうち注意されるのは、宣勅、受上表、冊命諸臣など、南北朝までの朝堂で行なわれていたものが見えることである。これらは宮中との関係が深いものである。朝堂が、隋唐代に廃止されずに、宮城正門前に置かれたのは、南北朝以来のこのような機能がなお残されていたためかも知れない。一方、隋唐の朝堂の機能のうち、訴訟、処刑など裁判の機能や、露布の宣告、外国使の接待・饗宴などは南北朝までの朝堂に無かったものである。『大唐六典』に承天門について、元正冬至大いに燕会を設け、過や罪をゆるし、旧を除き新を布き、万国の朝貢、四方の賓客を受ける時、皇帝は承天門に御して政を聴くとあるように、これらは元来、外朝である承天門を中心に行なわれた儀式と推定される⁶²⁾。そうであるとする、裁判、露布宣告、外国使饗宴などの機能は朝堂を外朝の広場に建てたことにより派生したものと考えてよいのかも知れない。

以上、隋の大興宮(唐・太極宮)の朝堂は空間、機能の両面において、南北朝までの朝堂に比べて大きく変質していたことが想定される。

(2) 唐大明宮の朝堂

大明宮は、唐の高宗の時、長安城の東北、龍首原上に造営された宮殿であり、以後、太極宮に替って歴代の皇居となった。宮城は東西広1674m、南北長2256m、東北部を欠いた不整形な長方形を呈す⁶³⁾。南面に五門を啓き、その中央正門を丹鳳門という。丹鳳門の内には高さ十数米の壇上に向って南北に龍尾道が延び、壇上正中

に含元殿が建てられた。含元殿は桁行13間、梁行6間、裳階付の重層建築であり、その前方左右に翔鸞・棲鳳兩閣を配し、含元殿との間に左右の飛廊を渡していた⁶⁴⁾。翔鸞・棲鳳兩閣は、李華の含元殿賦に「兩闕」と記される。含元殿は、太極宮の承天門に相当する外朝の正殿であり、大明宮の正殿として、それをより発展させた建築と考えられる。

大明宮の朝堂は、『大唐六典』(巻7)工部尚書郎中員外郎の大明宮の項に、翔鸞・棲鳳兩閣に注して、

「閣下即朝堂。肺石登聞鼓如_二承天之制_一。」

と記される。また、『唐兩京城坊攷』(巻1)大明宮の翔鸞・棲鳳兩閣項の注に、唐の舒元興の記を引いて、

「舒元興御史臺記曰、每_二朝会_一、監察御史二人立_二於東西朝堂軀道_一、雞人報_レ點、監者押_二百官_一、由_二通乾、觀象_一、入_二宣政門_一、及_二班於殿廷前_一、則左右巡使二人分押_二於鐘鼓楼下_一、」

とあり、東西兩朝堂の存在が知られる。兩朝堂の位置は棲鳳閣の西南、および翔鸞閣の東南に推定されている⁶⁵⁾。

大明宮朝堂の機能については、蕃客方物の給与、受上表、処罪などが知られる¹⁰⁾また、『旧唐書』(巻14)貞元二十一年七月乙未条に、詔により軍国政事を勾当するようになった皇太子は朝堂において百寮を召見したことがみえるが、朝堂における集議の例は認められない。

要約

漢および魏晉南北朝の宮殿では、宮門内にあって、禁中(禁省)東方の一郭に朝堂を置くのが一般的であった。朝堂は南面に正門を啓き、その内に正堂が建てられた。正堂の前は広い中廷であり、その左右に百官の位次が置かれたらしい。南北朝までの朝堂は丞相を中心に集議と儀礼を行なう場であったが、正堂および中廷からなる朝堂はそれに相応しい空間を形成していたと推察される。なお、魏晉南北朝の朝堂は南方の南掖門(南面宮牆の東門)と相對し、その間に南北の馳道あるいは閣道が通された。そして、その左右には尚書省などの宮内官署が配置され、整然たる構成をとっていたと推定される。このような構成が確立するのは後漢から曹魏の初めと考えられる。

一方、隋の大興宮(唐・太極宮)は宮城正門前の左右に南面して東朝堂、西朝堂が建てられた。これは、南北朝までの宮殿が、中朝として、朝堂を宮門内に置いていたのと大きく異なっている。隋唐の宮殿は、『周礼』にみえる三朝の制をとり、宮城正門を外朝としていた。東西兩朝堂は外朝に付設して、正門前の広場に建てられたのである。その淵源は、『周礼』の三朝制を復活し、また漢以来の複雑化した官制を『周礼』により簡略化した北周の長安宮に求められるかも知れない。なお、唐の大明宮は含元殿の前方、翔鸞・棲鳳兩閣の下に東西兩朝堂が置かれた。含元殿は太極宮の承天門に相当する外朝の

正殿である。このように外朝である宮城正門あるいは含元殿の前に付設して置かれた朝堂は、南北朝までの朝堂と異質な建築であり、そこはもはや国政を審議するような場では無かった。隋唐の朝堂は、主として宣勅、上表、冊命諸臣などの儀礼、あるいは訴訟、処罪の場にあてられ、集議は全く行なわれていない。宰相による政事は、禁省内にある門下・中書両省の政事堂にて議せられた。

注

- 1) 拙稿：古代宮殿建築における前殿と朝堂，その7，（『建築学会計画系論文報告集』348号，昭和60年2月）
- 2) 本稿の概要は昭和61年8月建築学会大会にて発表した。
- 3) 『古代学』11巻1号，昭和37年所収
- 4) 『難波宮と日本古代国家』難波宮址を守る会編，昭和52年，所収
- 5) 『三輔黄图』周回28里，『西京雜記』周回22里95步，『関中記』周旋31里
- 6) 『漢書』王莽伝に「王路朱雀門」，「白虎門」がみえる。
- 7) 班孟堅の西都賦，張平子の西京賦
- 8) 『三輔黄图』（巻3）未央宮項に「宣室，温室，清凉，皆在未央宮殿北」。宣明廣明，皆在未央殿東。昆德，玉堂，皆在未央殿西。」とある。
- 9) 読みは中島千秋編「文選」（新釈漢文大系79）によった。なお佐藤武敏「唐の朝堂について」は，これを「左右の庭中，朝堂百寮の位，蕭曹魏邴その上に謀議す」と読み，朝堂は庭中の左右二個所に設けられたとされるが，ここでは採らない。また，朝堂の位置を「正朝の前」と推定されているが，前述のように禁省の東方と考えられる。
- 10) 佐藤武敏：唐の朝堂について（前掲）
- 11) 『後漢書』（巻1下）光武帝建武十四年正月条
- 12) 『後漢書』（志第25，百官2）衛尉条の公車司馬門および宮掖門の項の「本注」
- 13) 後漢洛陽城に南北両宮あり。北宮は明帝永平八年に完成した。
- 14) 張平子の東京賦による。
- 15) 西嶋定生：中国の歴史，（講談社，昭和49年）
- 16) 魏都賦に「左則中朝有_レ_レ_レ，聽政作_レ_レ。」とある。「左」は文昌殿の左をいう。また，張載注に「中朝。内朝也。漢氏。大司馬，侍中，散騎，諸吏為_レ中朝。丞相，六百石以下為_レ外朝也。文昌殿東有_レ聽政殿。内朝所_レ在也。」と記す。
- 17) 魏都賦に「左則中朝有_レ_レ，聽政作_レ_レ。匪_レ樸匪_レ斷，去_レ泰去_レ基。木無_レ彫鏤，土無_レ緯錦。玄化所_レ甄，国風所_レ慕。」とある。
- 18) 魏都賦による。
- 19) 張載注に「聽政殿前聽政門。聽政門前升賢門。升賢門左崇禮門。右頌德門。三門並南向。升賢門前宣明門。宣明門前顯陽門。顯陽門前有_レ司馬門。閤守門也。」とある。
- 20) 張載注に「升賢門内。聽政閤外。東入。有_レ納言閤。尚書臺。宣明門内。升賢門外。東入。有_レ内盛署。顯陽門内。宣明門外。東入。最南有_レ謁者臺閤。次中央符節臺閤。最北御史臺閤。三臺並別西向。符節臺東有_レ丞相諸曹。」とある。
- 21) 『水經注』（巻16）穀水条に「魏明帝上法_レ太極，於_レ洛陽南宮，起_レ太極殿於漢崇德殿之故處，改_レ雉門為_レ問闥門。」とある。
- 22) 『三国志』（巻4）嘉平六年十月庚寅条，『晉書』（巻4）太安元年十二月丁卯条
- 23) 『晉書』（巻59）趙王倫伝に南掖門と雲龍門，同書（巻64）淮南忠壯王允伝に東掖門，『宋書』（巻14）禮志1に収める晉武帝の時に定めた元会注に雲龍門がみえる。
- 24) 『晉書』（巻59）趙王倫伝に「自_レ義兵之起，百官將士，咸欲_レ誅_レ倫秀_レ以謝_レ天下。」（中略）。義陽王威勸_レ秀至_レ尚書省，與_レ八坐_レ議_レ征戰之備。秀從_レ之。（中略）。内外諸軍，悉欲_レ却_レ殺秀，威福，自_レ崇禮閤，走還_レ下舍。（中略）。王與_レ反_レ之，率_レ營兵七百餘人，自_レ南掖門入，敕_レ宮中兵，各守_レ衛諸門，三部司馬，為_レ應於内。與_レ自往攻_レ秀，秀閉_レ中書南門。與_レ放_レ兵登_レ燧燒_レ屋。秀及超猗遶走出，左衛將軍趙泉斬_レ秀等_レ以徇。（中略）。三部司馬兵，於_レ宣化閤中，斬_レ孫弼_レ以徇。時司馬馥在_レ秀坐，與_レ使_レ將士囚_レ之于散騎省，以_レ大戟守_レ省閤。八坐皆入_レ殿中，坐_レ東除樹下。王與_レ屯_レ雲龍門。使_レ倫為_レ詔曰，（後略）」
- 25) 『晉書』（巻64）吳敬王晏伝，同書（巻33）鄧冲・何曾・石苞伝など。なお，『通典』（巻81）天子為大臣及諸親孝哀儀に引く摯虞決疑注に「國家為_レ同姓王妃，主發_レ哀於東堂，為_レ異姓公侯，都督發_レ哀於朝堂。」とあり，同姓と異姓により挙哀の場を東堂と朝堂とで使い分けていた。
- 26) 唐の許嵩撰『建康實錄』（巻7）晉成帝紀に『咸和七年冬十一月，是月新宮成，署曰_レ建康宮，亦名_レ顯陽宮，開_レ五門，南面二門，東西北各一門』とあり，その注記に「案_レ図經，即今之所謂台城也，今在_レ縣城東北五里，周八里，有_レ兩重牆」と記す。また，咸和五年九月条の注に引く輿地志に，北面都城門について「正北面用_レ宮城，無_レ別門」と記す。
- 27) 『晉書』（巻99）桓玄伝に，桓玄の永始二年頃，東掖，平昌，広莫及び宮殿諸門が開かれ，皆三道とされたことがみえる。朱僕『金陵古蹟図考』に，宋の永初中に平昌門を広莫門に改称したとあるが，上記の広莫門は詳らかでない。
- 28) 『晉書附注』（巻21）礼下・元会項の注に「晉起居注曰，成帝咸和八年十二月，有司奏，庭燎在_レ公車門外，令_レ更集議，旧在_レ端門内，依_レ旧門内施，詔曰，尚書奏，九年庭燎当在_レ端門内，元明帝時在_レ公車門内，可_レ依_レ旧安，司徒録公命_レ当率_レ由_レ旧章，宜_レ在_レ端門内」と記す。端門は禁省の正門，公車門は大司馬門と解される。
- 29) 朱僕『金陵古蹟図考』
- 30) 『建康實錄』によると，平昌門は宋の永初中に広莫門と改称された。また，宋の文帝元嘉二十五年に都城が北方に拡張され，その北面に新たに広莫門が作られた。それに伴い，宮牆北面の旧広莫門は承明門と改名された。
- 31) 『宋書』（巻5）文帝元嘉二十年正月条に「於_レ台城東西，開_レ万春，千秋二門。」とある。朱僕『金陵古蹟図考』に万春千秋二門は第二重宮牆の東西に開かれたとするが，台城東西に開くとなると，第一重宮牆に開かれた宮城門と解するのが穏当であろう。また『南史』（巻7）梁武帝大通元年正月条に大通門を開くとある。
- 32) 『梁書』（巻56）侯景伝に，太清三年十二月，百済の使臣が，侯景によって攻落されて丘墟と化した城邑を見て，端門外で号泣したので，路行く者は涙を澀がぬ者はなかつ

たと記す。端門は宮城門である。

- 33) 【梁書】(巻56)侯景伝に「景於_レ是百道攻_レ城,持_二火炬_一燒_二大司馬門,東西華諸門_一。(中略)。賊又斫_二東掖門_一,將_レ開,羊侃鑿_二門扉_一,刺_二殺數人_一,賊乃退。」とあり,東華門と東掖門は異なる。
- 34) 【宋書】(巻5)元嘉二十年正月条に万春門,千秋門,【南齊書】(巻7)東昏侯紀に万春門がみえる。
- 35) 【宋書】(巻4)少帝景平二年五月乙酉条に「是旦,道濟謝晦領_レ兵居_レ前,羨之等隨_レ後,因_二東掖門開_一,入_レ自_二雲龍門_一。盛等先戒_二宿衛_一,莫_レ有_二禦者_一。」とあり,雲龍門は東掖門の内に啓く宮門である。
- 36) 【宋書】(巻14)礼志1・皇帝臨軒儀条,同書(巻99)元凶劭伝を参照。
- 37) 【南史】(巻56)張弘策伝に「賊又進燒_二尚書省_一及_二閣道_一,雲龍門_一」とある閣道は,尚書省にある南北の閣道と思われる。
- 38) 【宋書】(巻61)江夏文獻王義恭伝,同書(巻71)王湛伝など。
- 39) 【晉書】(巻27)五行志上に「永興二年,七月甲午,尚書諸曹火起,延_二崇禮閣_一及_二閣道_一。」とある。これは西晉洛陽南宮に関する記事であるが,この閣道も南掖門の内を南北に通されたものと思われる。
- 40) 【隋書】(巻26)百官志上・陳制項に「国之政事,並由_二中書省_一。有_二中書舍人五人_一,領_二主事一人_一,書吏二百人_一。書吏不_レ足,并取_二助書_一分_二掌二十一局事_一,各當_二尚書諸曹_一,並為_二上司_一,總_二国内機要_一,而尚書唯聽受而已。」とある。
- 41) 王仲殊「中国古代都城概説」(『考古』1982年5期)
- 42) 中国科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城初步勘查」(『考古』1973年4期)
- 43) 【魏書】(巻67)崔鴻伝
- 44) 【魏書】(巻8)延昌三年八月甲申条に「帝臨_二朝堂_一,考_二百司_一而加_二黜陟_一。」とある。また,同書(巻13)宣武靈皇后伝に「又親策_二孝秀州郡計吏於朝堂_一。」とある。
- 45) 【魏書】(巻27)穆亮伝に,公卿が朝堂において政事を論じ,奏案を読ませて,帝が自ら決したことがみえる。これは平城宮の例であり,洛陽遷都以前に朝堂において公卿による集議が行なわれたらしい。
- 46) 【魏書】(巻21上)高陽王雍伝に「肅宗初,詔_二雍入_一居太極西栢堂_一,諮_二決大政_一,給_二親信二十人_一。」と記す。
- 47) 【魏書】(巻16)江陽王繼伝によると,門下省に門下八坐が置かれていた。
- 48) 村田治郎:中国の帝都,第2章,鄴都考略の項
- 49) 雲龍門が禁省東面の門であることは,【北齊書】(巻6)孝明帝乾明元年条の記載から推察できる。
- 50) 丸山 茂:古代廟建築についての一考察,(『建築史学』4号,1983年3月,建築史学会)が参照される。
- 51) 秋山日出雄:八省院=朝堂院の祖型,(『難波宮址の研究・第七』論考篇)に,鄴南宮の朝堂は閭闔門の南にあって,同門と尚書省との間の位置を占めていたと推定されている。ただし,同論考では,尚書省の内省と外省を区別しないこと,尚書省が雲龍門内に在ったとするなど疑問な点がある。
- 52) 【北齊書】(巻4)天保七年二月辛未条,同書(巻12)琅邪王儼伝など。
- 53) 王仲瑩【北周六典】(巻3)地官府・宮門中士の項
- 54) 【周書】(巻5)天和六年正月朔条,建德三年正月壬戌条,同書(巻7)大象元年正月癸巳条
- 55) 【隋書】(巻1)文帝開皇元年五月辛未条
- 56) 馬得志・楊鴻勳「關於唐長安東宮範圍問題的研討」(『考古』1978年1期)
- 57) 佐藤武敏:唐長安の宮城について,(『江上波夫教授古稀記念論集』考古・美術編,昭和51年11月)
- 58) 平岡武夫:唐代の長安と洛陽,資料(京都大学人文科学研究所,昭和52年11月)による。
- 59) 【隋書】(巻70)李子雄伝に「尋徵拜_二民部尚書_一。子雄明辯有_二器幹_一,帝甚任_レ之。新羅嘗遣_レ使朝貢,子雄至_二朝堂_一與語,因問_二其冠制所_一由。」とある。上表の例は,同書(巻2)開皇十一年五月癸卯条に「詔_二百官_一悉詣_二朝堂_一上_二封事_一。」同書(巻66)陸知命伝に「數年不_レ得_レ調,詣_二朝堂_一上表,請_レ使_二高麗_一,」とある。冤屈は,同書(巻37)梁竇伝に「睿初平_二王謙_一之始,自以_二威名太盛_一,恐為_レ時所_レ忌,遂大受_二金賄_一以自穢。由_レ是黜簿多不_レ以_レ實,詣_二朝堂_一稱_レ屈者,前後百數。」とある。処刑は,同書(巻38)劉昫伝に「臨_二刑至_一朝堂_一,宇文忻見_二高頸_一,向_レ之叩頭求_レ哀。」とあり,また同書(巻25)刑法志にみえる。
- 60) 嘉礼⑦⑧は筆者が加えた。
- 61) 【新唐書】(巻46)百官志1・宰相之職の項に「初,三省長官議_二事于門下省之政事堂_一,其後,裴炎自_二侍中_一遷_二中書令_一,乃徒_二政事堂於中書省_一。開元中,張說為_レ相,又改_二政事堂_一號_二中書門下_一,列_二五房于其後_一,一日吏房,二日樞機房,三日兵房,四日戸房,五日刑禮房,分_二曹以主_一衆務焉。」と記す。
- 62) 【隋書】(巻2)開皇九年四月庚戌条に「上御_二廣陽門_一宴_二將士_一,領賜各有_レ差。」とあり,將士の饗宴も皇帝が廣陽門に御して行なわれた。
- 63) 宿白「隋唐長安城和洛陽城」(『考古』1978年6期)
- 64) 傅熹年「唐長安大明宮含元殿原狀的探討」(『文物』1973年7期)
- 65) 佐藤武敏:唐の朝堂について,(前掲),馬得志「唐代長安與洛陽」(『考古』1982年6期)図二。

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 726.134

STUDY ON THE STATE CHAMBER AND THE HALLS OF STATE IN THE ANCIENT IMPERIAL PALACE

Part 8 The histories and the architectural characteristics of Chōdō (1)

by WATARU SUZUKI, Lecturer of Bunka Gakuin, Member
of A. I. J.

It is since Han age that the existence of Chao Tang (朝堂) is confirmed in the Chinese Imperial Palace. This paper is intended to study the formation of Chao Tang from Han to Tang age, and to show the process of its changes, as well as its architectural characteristics.